

POINT!

✓ 看護師と医師の2段階で問診を実施

看護師による問診後、その内容をもとに医師がさらに問診を実施。患者の生活背景をより深く把握し、治療につなげている。

✓ 目標や生活に関連づけ治療への意欲を持たせる

患者の治療への意欲を持続させるため、患者の生活での関心や目標と治療を結びつけて説明している。

✓ スタッフは近隣地域以外から採用

周りに知られたくない悩みを抱える患者もいるため、スタッフは診療所周辺地域以外に住む人材を採用。患者のプライバシーに配慮し通いやすくしている。



診察室は3室あり、看護師が各室で問診後に医師が交代で診察する仕組みだ



各診察室内には、子どもが退屈しないようおもちゃやお菓子を用意している



待合室ではモニターで疾患予防に関する情報などを発信



木下順平 院長

「治療には患者さん自身の努力が不可欠。治療と生活をセットで考えてもらいたいですね」



医療法人社団優聖会
アース皮ふ科クリニック
東京都足立区西新井栄町2-3-13
中里ビル3F
TEL: 03-3887-5470
URL: <http://www.nshc.com/>
診療内容: 皮膚科、美容皮膚科

習中も家でも、こまめに汗や汚れを落とそうね」と、より治療を生活の一部として捉えてもらいやすくなります」

あえて近隣から採用せず 患者のプライバシーに配慮

同院では治療以外でも、患者の通いやすい環境づくりに尽力している。その一つが、開院当初から続けている同院周辺エリア以外からの人材採用だ。現在は院長を含め、スタッフ全員が主に都内の別の区や埼玉県などから通勤しており、なかには茨城県から来ているスタッフもいるという。この意図について木下院長は、患者のプライバシーへの配慮を挙げている。「皮膚科では抜け毛やデリケートな部位のかゆみなど、周りに知ら

れたくない悩みも少なくありません。しかしスタッフがご近所さんやママ友だったら、患者さんは気まずい思いをして、来院しづらくなります。できるだけ患者さんの生活圏外に住む人材を採用することで、知り合いに鉢合わせるリスクを減らしています」

遠距離からの通勤と聞くと不便な印象を受けるが、最寄り駅と近隣のターミナル駅のアクセスが良好のため、スタッフの通いやすさも担保されているという。

木下院長は、「患者さんには、疾患のために何かを我慢しない、社会的にも満足した生活を送っていただきたい。そのためには、患者さん自身が治療を前向きに捉えて取り組めるように、これからもサポートしていきたいです」と、意気込みを語る。

治療から人材採用まで 患者中心の方針を徹底



生活背景に合わせた 治療方法を提案

2006年に東京都足立区で開院したアース皮ふ科クリニックには、アトピー性皮膚炎に悩む小児やその家族などを中心に、幅広い患者が受診している。同院では、治療から人材採用まで、あらゆる場面で患者中心の方針を徹底している。

治療のモットーは、患者自身が意欲的に治療へ取り組んでもらえるようにすることだ。そのためには、患者の生活背景も踏まえ、一人ひとりに合った治療方法の提案が不可欠だという。そこでより深く患者の情報を把握するため、問診を看護師と医師の2回にわたって実施している。

具体的には、患者が記入した問診票をもとに、まず看護師が診察室で問診を行う。症状の詳細はもちろん、たとえば手の症状なら、「仕事で手をよく使うか、職場は暑くないか」「家事のときは何か着用しているか、手をこするくせはないか」など、仕事内容や生活環境まで、疾患の原因になり得る

要素を探っていく。得られた情報はすべて医師に伝えられ、診察ではそれを踏まえて医師がさらに問診を行うのだ。

この問診について木下順平院長は、「看護師が先に問診しておくことで、気になる点や疑われる疾患が明確になり、より深く掘り下げられます。また、医師には話さなくても、看護師なら言えることもあるため、得られる情報量も増えます」と説明する。

また、薬の処方やスキンケアの指導をしても、「忙しい、面倒」など、なかなか継続しない患者も多い。より治療意欲を高めてもらうには、治療について患者の生活や目標などと関連づけて説明することが大切だ。事前に生活背景を理解しておくことは、より精度の高い説明につながると、木下院長は強調する。

「アトピー性皮膚炎のお子さんに対し、生活背景を知らなければ、ただ肌を清潔に保つように指導するだけにとどまります。たとえば問診の段階でサッカーが好きで、毎日練習していると知っていれば、『アトピーがよくなれば、プレーに集中できるよね。だから練